



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより3月号2012

今月の予定

聖歌練習 名古屋:11日代式後 半田:14日先備後

聖歌は神さまへの捧げものです。毎聖体礼儀後もミニ練習を行います。名古屋も半田も「みんなで歌える」聖歌をめざしてきました。だからといってブツケ本番ではなく、「みんなで練習」もしましょう。

名古屋指揮当番

4日マリア松島 18日ピーメン松島 25日エレナ広石

ズナメニイ研究会

今月はお休み。

知って祈ろうー奉神礼は面白い

エウハリストニア

感謝の祈りーアナフォラ・聖変化

実は最も大切な祈りは黙誦祝文といわれる、至聖所で司祭が唱えていることばにあります。もともと初代教会では信徒全員がテーブルを囲み、司祷者がはっきりと声に出して祈りを唱えていました。当時は決まった定式文の祈りではなく、司祷者が力量に応じて即興で唱えました。祈りが黙誦になったのは、ビザンティン時代になって聖堂が大きくなり、結果として聞こえなくなっただけです。黙誦secret prayerということばから神品だけに許された秘密の祈りと誤解されたこともあります。聖体礼儀の本当の有り難さはこの祝文を知らずしてはわかりません。



爾を歌頌し、爾を讃揚し、爾を讃美し、爾に感謝し、爾が一切治むるところにおいて、爾に伏し拝むは当然にして義なり、けだし爾と爾の独生子と爾の聖神は、言い難く、知り難く、見るべからず、測るべからず、永く在り、恒に変らざる神なり。爾は我等を無より有となし、陥りし者をまた起し、及び我等を天に昇らしめて、爾が来世の国を賜うに至るまで万事を行いて止めず、これらのために、およそ我等が知るところ、知らざるところ、顕れし所、顕れざりしところの我等に賜りし諸恩のために、我等爾と爾の独生子と爾の聖神とに感謝す、またこの奉事のために爾に感謝す、爾之を我等の手より領(う)くるを甘んじ給えり、然れども千々の神使首及び万々の神使ヘルビム及びセラフィム、六翼の者、多目の者、高く翔る者、翼をそなうる者は爾の前に立ちて、(高声)凱歌(かちうた)を歌い、よび、叫びて曰う、

聖聖なる哉主「サワオフ」、爾の光栄は天他に満つ、至と高きに「オサンナ」、

主の名に因りて来る者は崇めほめらる、至と高きに「オサンナ」、

人類の救いは神への讃美の回復です。神はその独り子を遣わし、聖体礼儀を行うことを可能にしてくださいました。今この教会は天に上げられました。そこでは(預言者イザヤが見たとおり)ヘルビムやセラフィム、天使たちが飛び交い、勝利の歌を歌います。天使とともに歌います。

「聖なる、聖なる、聖なる万軍の主。主の栄光は、地をすべて覆う。(イザヤ6:3)」

「主の名によって来られる方に、祝福があるように。いと高きところにホサナ(マタイ21:9)」

二世紀ごろの聖体礼儀の記録

護教家ユスティノスの第一弁明には

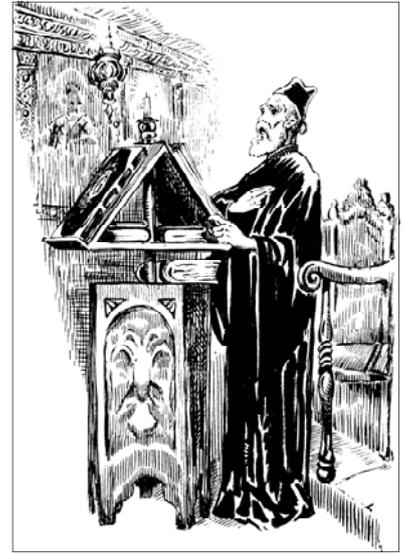
「太陽にちなんで呼ばれる日[日曜日]に、町や村に住む私たちの仲間、皆一つの所に集まり、時間の許す限り、使徒の記録、あるいは預言者の書物を読む。朗読者が読み終わると、司会者が、これらの美しい教えを学ぶよう勧め、励ます話をする。それから皆一緒に立って祈る。祈りがすむと、先に述べたように、パンとぶどう酒と水が運ばれ、司会者は、祈りと感謝を自分に与えられた力によって捧げ、皆は(アミン)と答える。こうしてエウカリストとなったものが、一人ひとりに配られ、欠席者にも輔祭によって配られる」(第67章3~5節)。

『古代キリスト教典礼史』J.A.ユングマン著、石井祥裕訳、平凡社

参考文献

『奉神礼』『教義』トマス・ホブコ著、西日本主教教区発行(教義は未発行)

『ユーカリスト』A.シュメーマン著、新教出版社



修道院の味わい 大 齋

修道院に滞在したことがありますか。ギリシアやロシアでは身近なところに修道院があり、人々は心が疲れたとき、また週末など時間がとれるときに気軽にでかけます。たいがいの修道院には宿泊施設があり、申し込めばわずかな献金で泊めてもらえます。訪問者は修道士たちと一緒に朝晩の祈りに参加したり、頼まれれば簡単な仕事を手伝ったりして静かな時を過ごします。こうして修道院の生活に身近にふれる中から修道を志す人が現れます。

残念ながら日本では気軽に行ける距離に修道院はありませんが、修道院の雰囲気をつくぶんかでも、自教会で居ながらにして味わえるのが大齋の平日の祈りです。私も洗礼を受けたばかりの頃神父さんから、有無を言わずといたった感じで「いいお祈りだから、来なさい」と言われ、よちよち歩きの子供を連れて参加しました。何もわからなかったけれど、日常と異なる何かを感じました。今でもその時の春の日差しの射す聖堂、やわらかな誦経の声を思い出します。ぜひ一度足を運んでみてください。いいお祈りですから。

大齋祈禱の特徴ーカノンについて

正教会の礼拝には、街の教会で発達した伝統と修道院の伝統が入り交じっていますが、大齋の平日の祈りは修道院の伝統を色濃く伝えています。

基本は『時課経』という祈禱書で、これを枠組みにして『三歌齋経』から、スティヒラやカノンが織り込まれます。日本ではスティヒラもカノンも読まれることが多いのですが、本来歌われるものです。

カノンはもともと、まっすぐの棒、基準、きまりなどを意味するギリシア語で、正典の意味にも使われます。西洋音楽にも輪唱のように同じメロディを繰り返すカノン様式がありますが、ここで言うカノンはそれとは別で、7-8世紀にエルサレム郊外の聖サワ修道院で始まった聖歌の様式です。旧約聖書の歌をベースにして、イイススによって旧約の預言がどのように成就したかを歌います。古い時代の修道院の聖詠経には聖詠だけでなく旧約聖書にふくまれるさまざまな歌も含まれていました。修道院では聖詠中心の礼拝が行われていたから、それが発展する形でカノンが作られました。

カノンは早課の後半、晩堂大課などに挿入されます。もともとはアカフィストのように別個に行われていた祈禱が後に早課の中に組み込まれたと思われる。

カノンには9つの章、歌頌 (ode) を含み、それぞれテーマが決まっています。

たとえば第1歌頌はモーゼ (モイセイ) の出エジプト記の1-15がもとになっています。

「主に謳わん、彼厳かに光栄を顕したればなり、彼は馬と乗り手を海に投げ打てり。佑 (たす) け護るもの顕れて、我が救いとなれり。彼は我が神なり、我彼を讃め揚げん・・・ (主に向かってわたしは歌おう。主は大いなる威光を現し、馬と乗り手を海に投げ込まれた。主はわたしの力、わたしの歌、主はわたしの救いとなってくださった。この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。)」

大齋に用いる『三歌齋経』は通常カノンには9つの歌頌があるのに、三つの歌頌 (tri-ode-ion) しかないことから名付けられた名称です。

カノンのなかで最も古いのが、クリトの主教アンドレイ (クレタ島の主教アンドレアス) の作とされる「アンドレイの大カノン」で、大齋中の第5週木曜早課に全編が行われる他に、大齋第1週の月曜から木曜までの晩堂大課で4つに分けて行われます。

カノンの黎明期であったために各歌頌はまだ特定のテーマとはっきりと関連づけられていませんが、旧約から新約までさまざまな聖書の登場人物の罪と悔い改めが、自分のこととして歌われます。教区教会では司祭が、主教座教会では主教が唱え、会衆は「神よ、我を憐れみ、我を憐れみ給え」と唱和します。

各歌頌の冒頭にはイルモスが歌われ、たとえば第1歌頌のイルモスでは上記の出エジプト記のモーゼの歌「佑け護るもの顕れて・・・」がそのまま歌われています。

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料